

カレン系言語の声調分岐

(音韻に関する通言語的研究プロジェクト研究会[於 AA 研 1997. 9. 28]で配布したハンドアウトを改訂)

加藤昌彦(かとうあつひこ)

0. はじめに

カレン系言語の歴史言語学的研究として、Haudricourt (1946)は最も重要な業績である。本発表では、Haudricourt が結論に至る過程で行ったと思われる作業を再現し、現代のカレン系言語の声調がいかんにして形成されてきたかを概観する。

1. カレン系言語とその系統

カレン系言語には次のようなものがある。単にカレン族と言った場合、次のうちのスゴー・カレンとポー・カレンだけを含むのが一般的である。

- (1) スゴー・カレン (Sgaw Karen) --- 近縁の言語としてパクー・カレン (Paku Karen) やパラチー・カレン (Palaychi Karen, Mopwa?) などがある。
- (2) ポー・カレン (Pwo Karen)
- (3) パオ (Pa-0) --- Jones (1961) のようにポー・カレンに近いと考える説もあるが、おそらくはまずスゴーとポーを同一語群としてまとめるべき。
- (4) カヤー (赤カレン; Kaya, Karenni)
- (5) ボエー・カレン (Bwe Karen) --- ゲーバー (Geba ; カレン・ビュー Karenbyu とも言う)、マノー (Mano)、ブレー (Bre)、ブリモー (Blimaw)、インタレー (Yintale) などの、カヤー州近辺の山地で話される言語の総称。言語学的にもまとまりを示すかどうかは不明。
- (6) パダウン (Padaung) --- 言語的に近いものとしてインボー (Yinbaw) やゲーコー (Gekho) などがある。

このうちの多くは、ビルマ (ミャンマー) 東部の山岳地帯で使用されている。政治的理由などにより調査があまり進んでおらず、そのためもあってカレン系言語内部の系譜的關係についても定説はない。

カレン系諸言語を考える上での大きな問題のひとつは、シナ・チベット諸言語内部における系統的な位置づけである。カレン系諸言語の語彙を見る限り、圧倒的多数がチベット・ビルマ諸語との一致を示す。ところが、カレン系諸言語の基本語順は SVO であるのに、チベット・ビルマ諸語のほとんどは SOV を基本語順としている。このこともあって、Benedict (1972) は、Sino-Tibetan > Tibeto-Karen + Chinese という分岐の後、Tibeto-Karen > Karen + Tibeto-Burman という分岐が起こったと想定し、カ

レンを他のチベット・ビルマ諸語とは別扱いにした。

しかし最近では、カレン系諸言語はチベット・ビルマ系に属するのであって、周辺のモン・クメール系言語あるいはタイ系言語などのSVO型言語と接触し、その影響で語順をSOVからSVOに変えたとする考え方が有力になっている (Matisoff [1991]を参照。また、チベット・ビルマ諸語との関係については Mazaudon [1985], Weidert [1987]を参照)。

以下にチベット・ビルマ祖語 (Benedict [1972]から引用) との対応例の一部を示す。カレン語の例はポー・カレン語東部方言 (発表者の資料)。

Pwo	kha55	「苦い」	; TB	*ka
Pwo	khɯ55	「煙」	; TB	*kuw
Pwo	tha11	「織る」	; TB	*tak
Pwo	thi51	「水」	; TB	*ti(y)
Pwo	pha33	「父」	; TB	*pa
Pwo	phɯ51	「祖父」	; TB	*puw
Pwo	cha51	「痛い」	; TB	*tɕa
Pwo	θi51	「死ぬ」	; TB	*siy
Pwo	na51	「鼻」	; TB	*s-na
Pwo	na33	「耳」	; TB	*g-na
Pwo	nein51	「年」	; TB	*ninN
Pwo	mein11	「名」	; TB	*r-miN
Pwo	mɨ55	「火」	; TB	*r-may
Pwo	jə11	「私」	; TB	*Na
Pwo	jɛ33	「五」	; TB	*l-Na
Pwo	la11	「月」	; TB	*s-la~*g-la
Pwo	louŋ33	「石」	; TB	*r-luN
Pwo	ɣu33	「蛇」	; TB	*b-ruŋ1
Pwo	gein55	「家」	; TB	*kim
Pwo	wa11	「夫」	; TB	*wa

2. カレン系諸言語の通時的研究

カレン系諸言語内部の歴史言語学的研究には、Haudricourt (1946, 1953, 1975)、Jones (1961)、などの論攷がある。このうち最も重要なのが Haudricourt (1946)である。その論点は、カレン系諸言語がタイ系諸言語と同様に、祖語における3種類の頭子音クラス (Thai 語学でいう高・中・低の子音クラス) を条件として声調を分岐させたということである。この考え方は Benedict (1972)、Weidert (1987) などにも受け継がれ、大枠では修正されていない。これから Haudricourt の説がいかなるものかを見ていくことにするが、それに先だって、現代カレン語の声調を概観する。

3. 現代カレン諸方言の声調

ここでは、発表者がこれまでに調査する機会のあった、3種のスゴー・カレン語の方言と、3種のポー・カレン語の方言における声調の体系をしてみる。音節を単独で発音したときの声調型を示す。

3. 1. スゴー・カレン語パアン(Hpa-an)方言 (加藤[1993]による)

ビルマ連邦カレン州パアン市で話される。Jones (1961) のモールメイン(Moulmein)方言に近い。

cf. Jones (1986)の解釈(モールメイン方言)

高平	[55]	/sha55/ 「痛い」	/má/ ¹
中平	[33]	/ma33/ 「行う」	/mà/
低平	[11]	/pa11/ 「父」	/màh/
下降	[41]	/kha41/ 「苦い」	/máh/
中止	[33]	/thaʔ33/ 「鉄」	/máʔ/
低止	[11]	/paʔ11/ 「破れる」	/màʔ/

3. 2. スゴー・カレン語ヘンサダ(Hinthada)方言 (加藤[1992]による)

ビルマ連邦イラワジ管区ヘンサダ市で話される。Jones (1961) のバセイン(Bassein)方言に近い。

高平	[55]	/sha55/ 「痛い」	
中平	[33]	/ma33/ 「行う」	
低平	[11]	/pa11/ 「父」, /kha11/ 「苦い」	
中止	[33]	/thaʔ33/ 「鉄」	
低止	[11]	/paʔ11/ 「破れる」	

3. 3. スゴー・カレン語メーサリアン(Maesariang)方言 (加藤[1992]による)

タイ国メーホンソーン県メーサリアン市で話される。声調体系はヘンサダ方言に似る。

高平	[55]	/cha55/ 「痛い」	
中平	[33]	/ma33/ 「行う」	
低平	[11]	/pa11/ 「父」, /kha11/ 「苦い」	
中止	[33]	/thaʔ33/ 「鉄」	
低止	[11]	/paʔ11/ 「破れる」	

3. 4. ポー・カレン語パアン(Hpa-an)方言 (Kato [1995]による)

ビルマ連邦カレン州パアン市で話される。声門閉鎖音で終わる声調があったと考えられるが、現在では高平と低平に合流している。

¹ Jones (1986)は、phonationの違いに基づく音節のタイプ分けをし、それぞれのタイプの中でピッチの対立が生じるような言語を pitch register language と呼び、カレン語をその例だとする。/-h/で示されるのは breathy なタイプ、/-q/で示されるのは creaky なタイプである。しかし、この解釈はいささか過剰分析の感を免れない。Jones の解釈に従えば/mà/と/màh/は音節のタイプによる対立と考えられようが、実際の発音ではそれほど目立った phonation の違いが認められないからである。

高平	[55]	/kha55/ 「苦い」 ,	/ja55/ 「破れる」
中平	[33]	/pha33/ 「父」	
低平	[11]	/ma11/ 「行う」 ,	/tha11/ 「鉄」
下降	[51]	/cha51/ 「痛い」	

3. 5. ポー・カレン語タボイ (Tavoy) 方言 (Kato [1995]による)

ビルマ連邦テナセリム管区タボイ市で話される。

cf. Jones [1986]の解釈(モールメイン方言)

中平	[33]	/pha33/ 「父」	/má/
低平	[11]	/ma11/ 「行う」	/mà/
高降	[54]	/kha54/ 「苦い」	/máq/
低降	[51]	/cha51/ 「痛い」	/màq/
中止	[33]	/jaʔ33/ 「破れる」	/máʔ/
低止	[11]	/thaʔ11/ 「鉄」	/màʔ/

3. 6. ポー・カレン語チョウンビョー (Kyonbyaw) 方言 (Kato [1995]による)

ビルマ連邦イラワジ管区チョウンビョー市で話される。

高平	[55]	/ma55/ 「行う」	
低平	[11]	/kha11/ 「苦い」 ,	/sha11/ 「痛い」
下降	[51]	/pha51/ 「父」	
高止	[54]	/jaʔ51/ 「破れる」 ,	/thaʔ51/ 「鉄」

3. 7. 文例

・スゴー・カレン語 (ヘンサダ方言)

- (A) nə- he55 ke33 phe55 le11
2sg 来る 帰る どこ か 「どこからお帰りですか？」
- (B) jə- he55 ke33 lə55 ta11 ʔo11phyo11 lə33
1sg 来る 帰る LOC 事 集まる 丁寧 「集会に行ってきました」
- (A) nə- mo11 nə- pa11 ʰe11 ʔo11 shu11 fia55
2sg 母 2sg 父 PL 居る 強い か 「ご両親はお元気ですか？」
- (B) me11 , ʔo11 shu11 ʔo11 khle55 koʔ33 ya33 deʔ33 lə33
はい 居る 強い 居る 平和な 毎 ~人 毎 丁寧 「二人とも元気です」

・ポー・カレン語 (バアン方言)

- (A) nə- ye51 thain33 khə51 le51
2sg 来る 帰る どこ か 「どこからお帰りですか？」
- (B) jə- ye51 thain33 lə55 chə- ʔə:kən: lə51
1sg 来る 帰る LOC 事 集まる 丁寧 「集会に行ってきました」
- (A) nə- mo33 nə- pha33 ʰi55 ʔə55 chon55 ka51
2sg 母 2sg 父 PL 居る 強い か 「ご両親はお元気ですか？」
- (B) mwe33 , ʔə55 chon55 ʔə55 khlain51 ko33 ya11 de11 lə51
はい 居る 強い 居る 平和な 毎 ~人 毎 丁寧 「二人とも元気です」

4. Haudricourt (1946)の仮説とその作業の再現

Haudricourt (1946)は W. C. B. Purser 師の A Comparative Dictionary of the Pwo-Karen Dialect (1922; Rangoon: American Baptist Mission Press)を用い、スゴー・カレン語とポー・カレン語の比較を行い、カレン祖語再建を試みた。Purser の著作は、キリスト教ポー・カレン文字で書かれたポー・カレン語の語彙集である²。この語彙集が便利なのは、対応するスゴー・カレン語の形式がキリスト教スゴー・カレン文字で併記されていることである。Haudricourt はこの辞書を用いてスゴー・カレン語とポー・カレン語の語彙比較を行った³。

Haudricourt (1946) において、声調の再建については考察の結果のみが示されているだけである。ここでは、Haudricourt が声調の再建をする際に行ったと思われる作業を再現してみたい。以下、語例はすべて発表者自身の資料から取ったものである。

ところで、キリスト教スゴー・カレン文字は 1830 年代に、キリスト教ポー・カレン文字は 1850 年代に、発案されたとされる⁴。ところが、これらの文字が作られたときの音韻体系をそのまま現在まで保存する方言は私の知る限り存在しない⁵。特にポー・カレン語で文字体系と現在の音韻体系のずれが激しい。したがって、以下では、スゴー・カレン語とポー・カレン語の形式として、文字成立の頃の推定形式（現代諸方言の音韻体系を文字体系と照合して得られたもの）を挙げる。なお、以下で現代カレン語と呼ぶのは、キリスト教文字成立の段階のカレン語である。

(1) スゴー・カレン語の声調とポー・カレン語の声調には規則的な対応が次のとおり 7 種類観察される。

①Pwo 11 ; Sgaw 33

Pwo /phle11/ ; Sgaw /ple33/ 「舌」, Pwo /phəN11/ ; Sgaw /pu33/ 「中」
Pwo /chan11/ ; Sgaw /pəcɔ33/ 「霧」, Pwo /thon11/ ; Sgaw /to33/ 「橋」
Pwo /khɛ11/ ; Sgaw /kɛ33/ 「光る」, Pwo /ma11/ ; Sgaw /ma33/ 「行う」
Pwo /lan11/ ; Sgaw /lɔ33/ 「降りる」, Pwo /jain11/ ; Sgaw /ji33/ 「遠い」
Pwo /nə11/ ; Sgaw /na33/ 2sg 独立形, Pwo /jə11/ ; Sgaw /ja33/ 1sg 独立形

②Pwo 11 ; Sgaw 55

² 解説部分には東部方言に基づくと書いてあるが、実際には東部方言と西部方言が区別されずに記載されている。

³ 実地調査に依ったわけではないため、一部に音価の誤認があり、これは後に Haudricourt (1953) で訂正された。

⁴ これ以外にも、やはり 1800 年代に成立した仏教ポー・カレン文字というのが存在する。

⁵ そもそも、キリスト教スゴー・カレン文字にしても、キリスト教ポー・カレン文字にしても、カレン州近辺の方言に基づいて作られたと考えられ、デルタやタイ側の方言の音韻体系が、文字に反映した音韻体系とかけ離れていてもまったく不思議ではない。なお、文字成立の時代の音韻体系と現在の音韻体系が最も良く一致するのは、スゴー・カレン語パアン方言である。

Pwo /plan11/ ; Sgaw /plɔ55/ 「きれいな」, Pwo /tain11/ ; Sgaw /te55/ 「作る」
 Pwo /ce11/ ; Sgaw /ce55/ 「銀」, Pwo /ku11/ ; Sgaw /ku55/ 「殻」
 Pwo /kon11/ ; Sgaw /ku55/ 「(腰布などを)はく」, Pwo /ʔain11/ ; Sgaw /pəʔi55/ 「餅米」
 Pwo /ʔɔ11/ ; Sgaw /ʔɔ55/ 「飲む」, Pwo /bon11/ ; Sgaw /bo55/ 「～本(助数詞)」
 Pwo /ba11/ ; Sgaw /ba55/ 「祈る」, Pwo /dɔ11/ ; Sgaw /dɔ55/ 「ナイフ」

③Pwo 51 ; Sgaw 55

Pwo /phɔ51/ ; Sgaw /phɔ55/ 「花」, Pwo /thi51/ ; Sgaw /thi55/ 「水」
 Pwo /chon51mon55/ ; Sgaw /cho55kəmo41/ 「考える」, Pwo /khe51/ ; Sgaw /khe55/ 「虎」
 Pwo /mi51/ ; Sgaw /mi55/ 「寝る」, Pwo /nən51/ ; Sgaw /nə55/ 「臭う」
 Pwo /xi51/ ; Sgaw /xi55/ 「美しい」, Pwo /lan51/ ; Sgaw /lɔ55/ 「雷」
 Pwo /jɔ51/ ; Sgaw /jɔ55/ 「易しい」, Pwo /si51/ ; Sgaw /si55/ 「死ぬ」

④Pwo 33 ; Sgaw 11

Pwo /pha33/ ; Sgaw /pa11/ 「父」, Pwo /thon33/ ; Sgaw /to11/ 「つく、つぶす」
 Pwo /chi33ca11/ ; Sgaw /ci11xa55/ 「混ぜる」, Pwo /kho33/ ; Sgaw /ko11/ 「暑い」
 Pwo /mo33/ ; Sgaw /mo11/ 「母」, Pwo /ne33/ ; Sgaw /ne11/ 「得る」
 Pwo /wɛ33/ ; Sgaw /wɛ11/ 「兄、姉」, Pwo /ɣain33/ ; Sgaw /ɣi11/ 「力」
 Pwo /lan33/ ; Sgaw /lɔ11/ 「場所」, Pwo /je33/ ; Sgaw /je11/ 「五」

⑤Pwo 55 ; Sgaw 41

Pwo /tan55/ ; Sgaw /tɔ41/ 「厚い」, Pwo /ko55/ ; Sgaw /ko41/ 「菓子」
 Pwo /ʔan55/ ; Sgaw /ʔɔ41/ 「食べる」, Pwo /phon55/ ; Sgaw /phɔ41/ 「捕える」
 Pwo /tho55/ ; Sgaw /tho41/ 「鳥」, Pwo /chain55/ ; Sgaw /chi41/ 「酸っぱい」
 Pwo /kho55/ ; Sgaw /kho41/ 「頭」, Pwo /ja55/ ; Sgaw /ja41/ 「魚」
 Pwo /di55/ ; Sgaw /di41/ 「卵を産む」, Pwo /me55/ ; Sgaw /me41/ 「火」
 Pwo /ba55/ ; Sgaw /ba41/ 「正しい」, Pwo /sa55/ ; Sgaw /sa41/ 「実」
 Pwo /la55/ ; Sgaw /la41/ 「葉」, Pwo /wa55/ ; Sgaw /wa41/ 「竹」

⑥Pwo ʔ33 ; Sgaw ʔ11

Pwo /phaiʔ33/ ; Sgaw /piʔ11/ 「(火が)消える」, Pwo /theʔ33/ ; Sgaw /teʔ11/ 「切れる」
 Pwo /choʔ33/ ; Sgaw /coʔ11/ 「運ぶ」, Pwo /khoʔ33/ ; Sgaw /koʔ11/ 「首」
 Pwo /meʔ33/ ; Sgaw /mɛʔ11/ 「目、顔」, Pwo /jaiʔ33/ ; Sgaw /jiʔ11/ 「久しい」
 Pwo /laiʔ33/ ; Sgaw /liʔ11/ 「文字」, Pwo /jaʔ33/ ; Sgaw /jaʔ11/ 「破れる」

⑦Pwo ʔ11 ; Sgaw ʔ33

Pwo /tiʔ11/ ; Sgaw /təʔ33/ 「建物」, Pwo /coʔ11/ ; Sgaw /coʔ33/ 「(鳥が)つつく」
 Pwo /koʔ11/ ; Sgaw /koʔ33/ 「呼ぶ」, Pwo /phaiʔ11/ ; Sgaw /phiʔ33/ 「皮」
 Pwo /thaʔ11/ ; Sgaw /thaʔ33/ 「鉄」, Pwo /cheʔ11/ ; Sgaw /cheʔ33/ 「突き刺す」
 Pwo /khaʔ11/ ; Sgaw /khaʔ33/ 「射る」, Pwo /meʔ11/ ; Sgaw /mɛʔ33/ 「砂」
 Pwo /noʔ11/ ; Sgaw /noʔ33/ 「口」, Pwo /loʔ11/ ; Sgaw /loʔ33/ 「返済する」
 Pwo /soʔ11/ ; Sgaw /soʔ33/ 「着る」, Pwo /baiʔ11/ ; Sgaw /biʔ33/ 「詰まる」

(2) 上に挙げた語例の頭子音を見てみると、閉鎖音の分布にある種の偏りがあることがわかる。

・ Pwo /PH/ ; Sgaw /P/ の対応は①④⑥にしか現れない。

- Pwo /P/ ; Sgaw /P/ の対応は②⑤⑦にしか現れない。
- Pwo /PH/ ; Sgaw /PH/ の対応は③⑤⑦にしか現れない。

(3) おそらく、Pwo /P/ ; Sgaw /P/ の対応を示す語彙は祖語において無声無気閉鎖音だっただろうし、Pwo /PH/ ; Sgaw /PH/は無声有気だったと考えられる。問題になるのは Pwo /PH/ ; Sgaw /P/ の対応である。しかし、タイ語などからの類推から、これは祖語において有声閉鎖音であったと推定できる⁶。

(4) もしそうだとすると、①～⑦の対応を示す閉鎖音始まりの語彙は、祖語における有声・無声無気・無声有気の対立を条件として声調を分岐させたと推定される。祖語における子音の種類によって①～⑦の対応は次のように整理することができる。

*有声	-----	{ ①、④、⑥ }
*無声無気	-----	{ ②、⑤、⑦ }
*無声有気	-----	{ ③、⑤、⑦ }

(5) このように整理してみると、①～⑦の対応のうちいくつかの組み合わせは、子音のタイプを条件として相補的に分布していることが分かる。そして、相補的な分布を示すものは、祖語において同一の声調だったのではないかと考えられる。このうち、有声か無声かによって相補分布を示す⑥と⑦については、ポー・カレンとスゴー・カレン両方で声門閉鎖音を末尾に伴うので、同じ声調だったと考えることに問題はない。

(6) 問題なのは、①－②③および④－⑤という組み合わせをとるか、それとも④－②③および①－⑤という組み合わせをとるかである。これにはポー・カレンとスゴー・カレン個々の声調を見ても必要がある。①と②では共通してポー・カレン語の 11 が現れる。また、②と③では共通してスゴー・カレン語の 55 が現れる。したがって、①－②③および④－⑤という組み合わせを採用するのが妥当である。

(7) 結果、カレン祖語には、3種類 (*1, *2, *3 と示す) の声調が再建でき、祖語の段階の頭子音の種類を条件として、ポー・カレンおよびスゴー・カレンで次のように受け継がれたと考えることができる。

⁶ Haudricourt が仮定した祖語における有声閉鎖音の存在は、後に、Luce (1959) や Henderson (1961, 1979) によるボエー・カレン語についての報告で証明された。ボエー・カレン語には有声破裂音の系列が保存されているのである。例えば、Pwo /kho33/; Sgaw /ko11/ 「暑い」の祖形として*go 2 のようなものが想定できる。対応するボエー・カレン語 (Blimaw 方言) は/go2/ 「暑い」 (Henderson [1979:321]) であり、Haudricourt の仮説を支持する形となっている。Jones (1961) の再建では、このような点がまったく配慮されておらず、それがこの研究の最大の弱点となっている。

[表 1]

	*1	*2	*3
*有声	Pwo 11;Sgaw 33	Pwo 33;Sgaw 11	Pwo ?33;Sgaw ?11
*無声無気	Pwo 11;Sgaw 55	Pwo 55;Sgaw 41	Pwo ?11;Sgaw ?33
*無声有気	Pwo 51;Sgaw 55	Pwo 55;Sgaw 41	Pwo ?11;Sgaw ?33

(8) 閉鎖音に限って見ている場合にはこれでよい。他の子音に視野を広げたときに問題点が2つ生ずる。ひとつめは、鼻音、側音、流音、半母音など(sonorant;sonant)で、「*有声」のパターンではなく「*無声有気」のパターンの対応を示すもの(Pwo /mi51/ ; Sgaw /mi55/「寝る」など)をどう考えるかという問題、ふたつめは、現代カレン語の b と d が、「*有声」の対応ではなく「*無声無気」の対応を示すこと(Pwo /ba11/ ; Sgaw /ba55/「祈る」など)をどう考えるかという問題である。

ひとつめの問題に関しては、無声の sonorant を祖語に再建することによって解決できる。ex.) *hmil「寝る」(Haudricourt の表記では'm)⁷

もうひとつの問題に関しては、p, t に *pp, *tt、b, d に *p, *t という形を暫定的に再建する⁸。

(9) 頭子音の種類としては次のようなものが再建できる。(表記は一部変えてある)

*有声グループ(série basse)

ng ny n m l r w gr br y

*無声無気グループ(série moyenne)

k c tt t pp p

*無声有気グループ(série haute)

k' c' t' p' 'n 'ny 'n 'n 'm 'l 'w s k'r p'r x

※この議論にとって幸運だったのは、スゴー・カレン語とポー・カレン語が、カレン系諸言語の中で最も多い、6声調を持っていたことである。Haudricourt によるこの再建は、少なくとも声調に関していえば、パオ語(6声調)、カヤー語(4声調)、ボエー・カレン諸語(2~3声調)などを視野に入れたときにも齟齬をきたさない。

⁷ 先の有声閉鎖音の再建と同様、無声の sonorant の再建は Luce (1959)や Henderson (1961, 1979)によるボエー・カレン語の報告で支持された。しかし、Weidert (1987)によると、Weidert 自身が調査したボエー・カレン語 Chitabu 方言には、これに対応するものとして声門化した sonorant が観察され、このことから祖語の段階には *sm などの子音結合を想定するほうが良いとする(p. 325)。

⁸ 私が確認できた範囲では、現代スゴー・カレン語諸方言、現代ポー・カレン語諸方言、およびパオ語北部方言で、b, d は implosive である。おそらく祖語にも、implosive の系列を設定しても良いのではないかと考える。

5. Haudricourt (1975)における修正点

Haudricourt (1975)においては、上の議論に大きな変更が行われる。それは次のような点である。

実は、上で見た①～⑦の対応とは別に、次の⑧のような対応が見出される。

⑧Pwo 55 ; Sgaw 55

Pwo /pho55/ ; Sgaw /pho55/ 「子供」, Pwo /ke55/ ; Sgaw /ke55/ 「成る」

Pwo /ʔa55/ ; Sgaw /ʔa55/ 「多い」, Pwo /do55/ ; Sgaw /do55/ 「殴る」

Pwo /mɛ55/ ; Sgaw /mɛ55/ 「歯」, Pwo /se55/ ; Sgaw /se55/ 「できる」

Haudricourt (1946)では、これについての言及がなく、いわば「例外」として扱われていたと思われる。同(1975)ではこれを改め、祖語に第4の声調を仮定している。こう考えたときの問題点は、「*有声」の系列にこの仮説を支持するような別の対応が見つからないことである。これについて Haudricourt は、④の対応 (Pwo 33 ; Sgaw 11) に融合してしまったのだろうと考える。

Haudricourt (1975)で提示された説を表にすれば次のようになるだろう。仮に「第4の声調」を*2' で示しておくことにする。

[表 2]

	*1	*2	*2'	*3
*有声	Pwo 11;Sgaw 33	Pwo 33;Sgaw 11		Pwo ʔ33;Sgaw ʔ11
*無声無気	Pwo 11;Sgaw 55	Pwo 55;Sgaw 41	Pwo 55;Sgaw 55	Pwo ʔ11;Sgaw ʔ33
*無声有気	Pwo 51;Sgaw 55	Pwo 55;Sgaw 41	Pwo 55;Sgaw 55	Pwo ʔ11;Sgaw ʔ33

この再建が正しいかどうかは今後も議論を要するところである⁹。

現在までほとんど調査の進んでいないパダウン系言語の調査なども含め、残された課題は多い。

参考文献

- Benedict, P. K. (1972). *Sino-Tibetan: a conspectus*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
 Chappell, H. (1992). "The benefactive construction in Moulmein Sgaw Karen." *Linguistics of the Tibeto-Burman Area*, 15:1, 11-30.
 Cooke, J. R., E. Hudspith and J. A. Morris (1976) "Phlong (Pwo Karen of Hot District, Chiang Mai)." In William A. Smally (ed.) *Phonemes and Orthography: Language Planning in Ten Minority Languages of Thailand*, Pacific Linguistics Series C-43, 187-220, The Australian National University.
 Haudricourt, A. G. (1946). "Restitution du karen commun." *BSLP* 42, 103-11. (Reprinted: Haudricourt 1972,

⁹ これについて Weidert (1987:331)は、別の声調を設定する必要はなく、スゴー・カレン語に“例外”が存在する原因は、カレン祖語の段階の形態論的複雑さに帰することができるのではないかと、と言っている。

- 131-40.)
- _____ (1953). "A propos de la restitution du karen commun." *BSLP* 49, 129-32. (Reprinted: Haudricourt 1972, 141-45.)
- _____ (1972). *Problèmes de Phonologie Diachronique*. Paris: SELAF.
- _____ (1975). "Le système des tons du karen commun." *BSLP* 70:1, 339-43.
- Henderson, E. J. A. (1961). "Tone and Intonation in Western Bwe Karen." *Burma Research Society Fiftieth Anniversary Publication*, No.1. Rangoon.
- _____ (1979). "Bwe Karen as a Two-tone Language?" *Pacific Linguistics*, Series C, No. 45.
- Jones, R. B. (1961). *Karen Linguistic Studies: description, comparison, and texts*. Univ. of California Publications in Linguistics, No. 25. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
- _____ (1986). "Pitch register languages." In J. McCoy and T. Light (eds.) *Contributions to Sino-Tibetan Studies*, 135-143. Leiden: E.J.Brill.
- Kato, A. (1995). "The phonological systems of three Pwo Karen dialects." *Linguistics of the Tibeto-Burman Area*, 18:1, 63-103.
- 加藤昌彦(1992)「カレン語の述部構造」東京大学修士論文。
- _____ (1993)「スゴー・カレン語の動詞連続」『アジア・アフリカ言語文化研究』45:177-204.
- Lehman, F. K. (1967) "Kayah Society as a function of the Shan-Burma-Karen context." In J. H. Steward, ed., *Contemporary Change in Traditional Societies*, Vol. II, 1-104. Urbana, Chicago, and London: University of Illinois Press.
- _____ (1979). "Who are the Karen, and if so, why? Karen ethnohistory and a formal theory of ethnicity." In Ch. F. Keyes, ed., *Ethnic Adaptation and Identity: the Karen on the Thai frontier with Burma*, 215-53. Philadelphia: Institute for the Study of Human Issues, Inc.
- Luce, G. H. (1959). "Introduction to the comparative study of Karen languages." *Journal of Burma Research Society* 42.1, 1-18.
- Matisoff, J. A. (1991). "Sino-Tibetan linguistics: present state and future prospects." *Annual Review of Anthropology* 20, 469-504.
- Mazaudon, M. (1985). "Proto-Tibeto-Burman as a Two-Tone Language? Some Evidence from Proto-Tamang and Proto-Karen." In Thurgood, Matisoff & Bradley, eds, *Linguistics of the Sino-Tibetan area: the state of the art. Papers presented to Paul K. Benedict for his 71st birthday*. Pacific Linguistics, series C-87, 201-229.
- 西田龍夫(1964)「R.B.ジョーンズ Jr.著カレン語研究：記述・比較・テキスト」『東洋学報』1-13.
- _____ (1966). 「ビルマにおけるパオ族の言語について-----南方パオ語パアン方言覚え書」『言語研究』50.
- Shafer, R. (1966-67/1974). *Introduction to Sino-Tibetan*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Solnit, D. B. (1987). *A Grammatical Sketch of Eastern Kayah (Red Karen)*. Ph.D. dissertation, Univ. of California, Berkley.
- Weidert, A. (1987). *Tibeto-Burman Tonology*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.

cf. Geba 語における祖語の子音の保存 (2004.12-2005.1 調査)

	「稻」	「人」	「花」	「名」	「火」
Geba	b ^u 33	bja33	ph ^o 55	mt33	hmt33
Pwo	b ^u 55	phlou ⁿ 11	ph ^o 51	mein33	me55
Sgaw	b ^u 55	pya33	ph ^o 55	mi33	me41